

# 『源氏物語』源典侍考

——「朝顔」巻の登場をめぐる——

杉浦一彰

## 一、問題の所在

源典侍は、物語の主要な展開に関与しない所謂〈端役<sup>①</sup>〉としてこれまで理解されてきたが、さまざまな面から検討がなされ、そのような既往の解釈からは解放されつつある。源典侍が最後に登場するのが、「朝顔」巻である。「朝顔」巻はその巻名が示すように、光源氏と朝顔姫君との交流が主に展開するため、源典侍の登場は唐突な感が否めない。

しかし先行研究は、源典侍が初登場する「紅葉賀」巻に比べて少ない。その原因としては登場場面の多少がある。ここで数少ない論考を挙げると、当該巻の懐古主義的な雰囲気との関わりから源典侍登場の意義を考察するものや、他の登場人物と比較・対照を試みるものがある。その一方で、本来注目されるべき、源典侍の挿話的な再登場<sup>②</sup>のありようと、彼女の「物語内行動」にはあまり注目されてこなかった。そこには所詮、〈端役〉に過ぎないとの意識が読み手の中に働いていたのだと考えられる。

本稿は、「朝顔」巻の物語展開を踏まえながら、源典侍がこの巻で担う役割や存在意義について考察する。特に、源典侍と光源氏との贈答歌のありように着目し、詠歌に込められた心情に迫りたい。

## 二、〈恋物語〉の実態

まずは、源典侍が登場するまでの物語状況を整理する。

齋院は御服にておりゐたまひにきかし。大臣、例の思しそめつること絶えぬ御癖にて、御とぶらひなどいとしげう聞こえたまふ。宮、わづらはしかりしことを思せば、御返りもうちとけて聞こえたまはず。いと口惜しと思しわたる。

(朝顔・②・四六九頁)<sup>1</sup>

右引用は、「朝顔」巻初発部分である。光源氏の新たな恋物語を予兆する語りは、藤壺との死別や冷泉帝への密奏といった「薄雲」巻を読み進めてきた読者に奇妙な印象を覚えさせる。物語作者は両巻間の内容の乖離を自覚していたようで、その解決のために、ここで光源氏の「御癖」を話題にする。「癖」については、秋山虔によつて、「日常の彼の歩調とは矛盾し背反する行動に身を委ねる」契機となる<sup>5</sup>ことが指摘されている。また、「癖」を持ち出したことで、読者には、「うちつけのすきずきしさは好ましからぬ御本性にて、まれには、あながちにひき違へ心づくしなることを御心に思しとどむる癖」(五三〜五四頁)があるという、「帚木」巻の物語叙述が想起され、自ずと空蟬のような女性との恋愛が期待させられていく。齋院を退いた朝顔姫君は、「わづらはしかりしことを思せば」とあるように、光源氏にこれまで靡かなかつた稀有な女性である。読者はこの難攻不落の女性に対し、光源氏がいかなる活躍をするか期待を高める。そうした読者の期待に応えるように、この巻には二人の関係を後押しする人物が登場する。

長月になりて、桃園の宮に渡りたまひぬるを聞きて、女五の宮のそこにおはすれば、そなたの御とぶらひにことづけ  
て参でたまふ。  
(朝顔・②・四六九頁)

高貴な出自ながらその存在の一切が語られてこなかった女五の宮が、朝顔姫君の桃園邸移住に伴って登場する。役割・存在意義が登場当初から暗示されているわけだが、彼女の次の発言にも注目したい。

「時々見たてまつらば、いとどしき命や延びはべらむ。今日は老も忘れ、うき世の嘆きみなさりぬる心地なむ」とても、また泣いたまふ。「三の宮うらやましく、さるべき御ゆかりそひて、親しく見たてまつりたまふを、うらやみはべる。この亡せたまひぬるも、さやうにこそ悔いたまふをりをりありしか」とのたまふにぞ、すこし耳とまりたまふ。

(朝顔・②・四七二頁)

肉親との死別などの悲しみを経験した女五の宮は、「よろづ心細く」(四七〇頁)暮らしてきた。光源氏の弔問は、その悲しみを慰謝するだけで無く、「老も忘れ、うき世の嘆きみなさりぬる心地」にさせてくれた。女五の宮がここで光源氏に、「すこし耳とま」る話題を提供するのは、あくまで彼の訪問を持続させようとする利己心の現れに過ぎなかった。悪く言えば、朝顔姫君を餌にして、光源氏を己のもとへと誘い出そうとしていたわけだが、結果的に男女関係を切り結ぶ役割を担っていくことになる。

しかし、光源氏と朝顔姫君の仲は遅々として深まらない。この巻の語り手はその原因として、恋愛を「わづらはしく思う朝顔姫君の意志強固な性情を挙げている。確かに、彼女の自照表現には、前齋院としての自尊心から社会的立場を貫徹しようとする姿勢や、「拒否の心情」が読みとれる。一方で、光源氏側の言動にも見過ごし難いものがある。

① 「院崩れたまひて後は、さまざまにつけて、同じ世のやうにもはべらず、おほえぬ罪に当たりはべりて、知らぬ世にまどひはべりしを、……」  
(朝顔・②・四七〇頁)

② 「山がつになりて、いたう思ひくづほればべりし年ごろの後、こよなく衰へてはべるものを。……」

(朝顔・②・四七一〜四七二頁)

右引用は女五の宮への光源氏の返答である。老女の思ひ出話をきっかけにして、「さまざまにつけて、同じ世のやうにもはべらず」と積年の苦勞を吐露し、「こよなく衰へてはべる」という発言まで漏らしている。中年期を迎えていた光源氏は、この対話を通じて、「同じ世」のように過こせない現実認識を固めていく。

こうした認識は、朝顔姫君との対話でも次のような影響を及ぼすことになる。

「すきずきしきやうになりぬるを」など、あさはかならずうち嘆きて立ちたまふ。「齡の積もりには、面なくこそなるわざなりけれ。世に知らぬやつれを、今ぞとだに聞こえさすべくやはもてなしたまひける」とて出でたまふなごり、  
ところせきまで聞こえあへり。  
(朝顔・②・四七五頁)

右引用では、光源氏の「すきずきし」い振る舞いへの自制心と、「齡の積もりには……」といった〈老い〉意識が垣間見える。光源氏が、「今さらに若々しき御文書きなども似げなきことと思」いつつも、「さらがへりてまめやか」(四七七頁)な文のやり取りをする様子が後に語られるのだが、彼の〈老い〉意識は、次のような感慨へと収斂していく。

昨日今日と思すほどに、三十年のあなたにもなりにける世かな、かかると見つつ、かりそめの宿をえ思ひ棄てず、木

草の色にも、心を移すよ、と思し知らるる。

(朝顔・②・四八一～四八二頁)

荒廢が進む桃園邸の様子に、世の中の流転の早さを感じ取った光源氏は、現世など、「かりそめの宿」に過ぎないと達観しながらも、未だに、「本草の色にも」、そして朝顔姫君にも「心を移す」己の現況を、痛いほど「思し知らるる」。周囲から、「御すき心の古りがたきぞ御瑕なめる」(四八一頁)と指弾される光源氏であったが、その心は、「癖」により再燃した恋情と、「すきずきし」い行動を慎むべきだとする「齡」認識との狭間で揺れており、そうした胸の中の葛藤を整理するまで、朝顔姫君に対して積極的な働きかけがとれるはずがなかった。

読者に期待される形で始まったこの巻の所謂〈恋物語〉は、朝顔姫君や光源氏という当事者同士の自制心が障害となり、進展の兆しが見えなかったのである。

### 三、源典侍との再会

物語が停滞の様相を見せ始める中、源典侍が、実質、光源氏の二度目の桃園邸訪問となる場面に登場する。

(a) いと古めかしき咳うちして参りたる人あり。(b) 「かしこけれど、聞こしめしたらむと頼みきこえさするを、世にあるものとも数まへさせたまはぬになむ。院の上は、祖母殿と笑はせたまひし」など名のり出づるにぞ、思し出づる。(c) 源典侍といひし人は、尼になりて、この宮の御弟子にてなむ行ふと聞きしかど、今まであらむとも尋ね知りたまはざりつるを、あさましうなりぬ。「その世のことは、みな昔語になりゆくを、はるかに思ひ出づるも心細きに、うれしき御声かな。親なしに臥せる旅人とはぐくみたまへかし」とて寄りゐたまへる御けはひに、いと昔思ひ出で

つつ、古りがたくなまめかしきさまにもてなして、(d) いたうすげみにたる口つき思ひやらるる声づかひの、さすがに舌つきにてうち戯れむとはなほ思へり。(e) 「言ひこしほどに」など聞こえかかるまばゆさよ。今しも来たる老のやうになど、ほほ笑まれたまふものから、ひきかへ、これもあはれなり。(朝顔・②・四八二―四八三頁)

この登場場面における源典侍の役割・存在意義を掴むため、人物造型に関わる傍線部 (a) ～ (e) を整理する。

源典侍は、傍線部 (a) のように「咳」をしつつ登場する。「咳」は、永井和子が、「衰退しかつ過剰な老人の異質性」を特徴づける動作だと指摘している。ここでは、「いと古めかしき」という表現まで加えられており、源典侍は登場と同時に、「老人」であることを読者に強く印象づけることになる。

次いで傍線部 (b) では、光源氏へと自己紹介をする。すでに光源氏が彼女を「祖母殿の上」(葵・五四頁)と呼ぶ場面があったので、当人同士には通用の呼称だと理解される。とはいえ、源典侍本人が、それを口にしたことは見過ごしがたい。なぜなら、外山敦子が、「雑音」<sup>9)</sup>として捉える傍線部 (d) の口調と合わせて見ると、より「老人」としての印象が強調されるからである。語り手によつて、傍線部 (c) の箇所彼女の境遇が紹介される際にも、「といひし人」とあり、「典侍」としての過去よりも、種々の制約が伴う「尼」である現況を読者に伝えようとしていることが窺えてくる。<sup>10)</sup> (a) から (d) の一連の叙述は、時の経過による源典侍の変貌を連想させる。

一方で、光源氏に「うち戯れ」ようにする気持ちは残っていたらしく、傍線部 (e) のような恨み言を告げる。それには、『源氏釈』以来、次の引歌が指摘されている。

身を憂しと言ひ来し程に今はまた人のうへとも嘆きつるかな

(冷泉家本所引・出典未詳)

この引歌表現をめぐっては、『弄花抄』<sup>12</sup>が、お互いの老いを嘆く趣旨の右の和歌と、「うち戯れむ」という行動とが矛盾するため、「此哥しゐて心叶はず」と注する。現行の注釈書は、引歌を認めた上で、「お互いに年を取りました、それゆえ、お相手としては五分五分、というほどの下意であろう」<sup>13</sup>や、「あなただつて年をとつた、として相手に応ずる」<sup>14</sup>と解釈する。源典侍には、「森の下草老いぬれば」(紅葉賀・三三七頁)という引歌表現をした過去があるので、「しゐて心叶はず」とまて捉える必要はない。むしろ、傍線部 (e) で注意したのは、二重傍線部で示した「今しも来たる老のやうに」という光源氏の感慨があることで、これにより読者に彼女の〈老い〉がだめ押的に印象づけられる。

以上、源典侍の人物造型を辿ってきたが、かつての〈好色〉な一面は失われており、彼女を「一向に老生しない魂の持ち主」<sup>15</sup>だと見る理解は肯えないと言える。また、次に挙げる女五の宮の人物造型との重なりあいにも留意したい。

宮、対面したまひて御物語聞こえたまふ。いと古めきたる御けはひ、(a) 咳がちにおはす。このかみにおはすれど、故大殿の宮はあらまほしく古りがたき御ありさまなるを、もて離れ、(d) 声ふつつかにこちごちしくおほえたまへるもさる方なり。(朝顔・②・四六九〜四七〇頁)

右引用で見られる女五の宮の身体的特徴や出家という境遇は、源典侍との類似的造型を示しているが、すでに渡瀬茂が、「女五の宮が、『老い』を自覚しその嘆きに沈みこむことによる老年の姿の残酷さを示すのだとすれば、源典侍は、『老い』を自覚せず、『老い』に似つかわしくない行動をすることの残酷さを示している」<sup>16</sup>と両者の対照関係を指摘する。しかし、源典侍が口にした「祖母殿」という自称を思い返すと、彼女もまた「老い」を自覚していたことはまず間違いないく、女五の宮と類する役割を想定すべきである。源典侍のみを、『新編全集』が指摘したような、「道化役」(四八四頁)と捉えることはできないのである。

源典侍の変貌に対し、光源氏の対応にも変化が認められる。前の引用本文で二重傍線を附した箇所を再び引用する。

「その世のことは、みな昔語になりゆくを、はるかに思ひ出づるも心細きに、うれしき御声かな。親なしに臥せる旅人とはぐくみたまへかし」

相手の正体に気づいた光源氏は、「あさましような」<sup>17</sup>るが、その口から出たのは、「うれしき御声かな」という異例な言葉であった。『新編全集』は、あくまで、「からかい半分のうれしがらせ、社交辞令」（頭注一六・四八三頁）と捉えるが、一方的な拒絶でないことには注意すべきであるし、加えて聖徳太子の伝承を基とした、「親なしに臥せる旅人」という引歌を交えた返答にも看過できないものがある。<sup>18</sup> 引歌表現により、慈愛を含んだ彼の眼差しが浮かび、それは、源典侍との応酬を、「ほほ笑まれたまふものから、ひきかへ、これもあはれなり」という感銘を覚える様子へと続く。この邂逅を好感的に受け入れる光源氏の姿がそこにはある。

源典侍の人物造型にしても、光源氏の対応にしてもこれまでとは異なることが確認されてくるのである。

#### 四、光源氏と源典侍の距離感

源典侍の人物造型などの変化を見てきたが、それでは両者の間にはどのような贈答が交わされるのであろうか。まずは贈答がなされる経緯から見ていく。

この盛りにいどみたまひし女御、更衣、あるはひたすら亡くなりたまひ、あるはかひなくてはかなき世にさすらへた



まふもあべかめり、入道の宮などの御齡よ、あさましとのみ思さるる世に、年のほど身の残り少なげさに、心ばへなども、ものはかなく見えし人の生きとまりて、のどやかに行ひをもうちして過ぐしけるは、なほすべて定めなき世なり、と思すに、ものあはれなる御気色を、心ときめきに思ひて若やく。  
(朝顔・②・四八四頁)

「この盛り」から始まる光源氏の心中思惟には、桐壺帝治世への憧憬と回帰願望が透き見える。先行研究が指摘するように、かつて「よしある宮仕人」(紅葉賀・三三五頁)として活躍した源典侍との再会は、現在と過去とのゆるやかな接続が可能にし、「なほすべて定めなき世なり」と光源氏の中に醸成されていた憂愁をより濃くすることになった。しかしここでもそうした彼の複雑な心中は他者に理解されない。光源氏の「ものあはれなる御気色」に触発される形で源典侍は次の贈歌を詠出する。

年ふれどこの契りこそ忘れね親とか言ひしひと言

(朝顔・②・四八四頁)

この和歌にも、源典侍の〈老い〉認識を反映する、「年ふれど」という表現があるが、単なる老いの嘆きに終始せず、光源氏との「契り」を訴えるところに彼女の面目躍如の感がある。好色さの残滓をそこに認めるべきなのかもしれない。一方で、「この契り」という表現には、『新編全集』が「この」の『こ』に『子』の意をかける(頭注五・四八四頁)と指摘するような意味合いが含まれており、和歌を「親の立場から詠歌され」たものに規定してしまう。

また、和歌には「『親』と『子』の結びつきに対する光源氏の意識を問い」<sup>21)</sup>かける「親の親」という表現まである。この表現については次の引歌が指摘されている。

源重之が母の近江のこふに侍りけるに、むまこのあづまよりよるのぼりていそぐ事侍りて、えこのたびあはでのぼりぬることといひて侍りければ、おばの女のよみ侍りける

おやおやおもはましかばとひてましわがこのこにはあらぬなるべし

〔拾遺集〕・雑下・五四五 ※『新編国歌大観』に拠る

詞書の点線部からは、息子の訪問を待ち続ける、「源重之が母」の悲哀が浮かぶ。そうした母の姿は、「名のり」出るまで、光源氏に忘れられていた源典侍の境遇と重なる。「親の親」には来訪を期待する相手の間遠を恨む気持ちが進められていたことになる。だが、この引歌は、あくまで「母」から子への訴えかけであり、同歌中の「この契り」という表現と響き合うことで、「親」と「子」の関係への問いのような印象を強めてしまう。同時に、それは、異性との性愛的関係に執着しなくなった彼女の心のありようを明かすことにもなる。

源典侍の最終詠では、悪戯に男性を求めるといつかの意識が吹き消え、彼女が〈古い〉という現実を受け入れたことが示されるのである。

それに対して光源氏は次のような返歌をする。

うとましくて、

「身をかへて後も待ちみよこの世にて親を忘るるためしありやと

頼もしき契りぞや。いまのどかにぞ聞こえさすべき」とて立ちたまひぬ。

(朝顔・②・四八四頁)

詠作時に、光源氏の心を占めていたのは、「うとましくて」という感情であった。彼の心は再会を「うれし」と告げた

その舌の根が乾かぬうちに、まるで掌を返すかのような動きをする。源典侍の好色ぶりを、「わびし」（紅葉賀・三四六頁）と辟易していた彼からすると、彼女の（古い）は歓迎すべき事態だったはずであり、何がそこまで彼を不快にしたのかという疑問が浮かぶ。以下、光源氏の和歌表現を手掛かりにその理由を検討する。

返歌には、「こ（子）の世」の掛詞や、「親」という表現が用られ、さらに、「忘るるためしありや」と彼女を受け入れる姿勢まで見せている。一方で、上句でまず配されるのは、「身をかへて後も待ちみよ」という表現である。この表現については、現在、『花鳥余情<sup>22</sup>』の「身をかへては生をかへて也」と、家井美千子らの「出家・遁世<sup>23</sup>」という解釈が提出されており、前者の解釈が多くの注釈書で採用されている。例えば、『新編全集』の「来世に生れ変つて後までも待つて見ていてください。」（四八四～四八五頁）という現代語訳がある。死後も待つてというのはいかにも辛辣である。

それに対し、家井氏は検証作業のまとめとして次のような解釈を示している。

源氏にとって、尼姿の源典侍の自分への恋情は忌避すべきものであった。しかしそれをストレートに拒否するのではなく、自分も志向する仏道への先達者として彼女を励まそうとする、いかにも目の前の女性には優しい、彼らしい歌いようではないか。

光源氏の心理にまで考察の射程を延ばした点で価値ある見解である。ただ右の解釈で問題となるのが、詠作時の「うとまし」という心情と照らし合わせた時に齟齬を来す点と、「彼らしい歌いよう」という捉え方からしても、その解釈に研究者の光源氏観が影響している点である。また、「出家・遁世」という解釈を採用したところで、己と相手との間に、出家者と在俗者という線引きをしようとする意識はくみ取れ得る。そのため、「身をかへて」という表現は、「転生」か「出家・遁世」かというように、二者択一的に解釈を選ぶことはあまり生産的だとは思えず、表現に内在する源典侍への忌避意識

を読み取るべきではないか。

「癖」と「齡」認識の狭間で苦悩していた光源氏にしてみれば、「うれし」とは口にしながらも、一足先に本願を果たした源典侍の尼姿は彼の心を掻き乱すことになったはずで、贈答直前の彼の長大な心中思惟がその複雑な心境を表している。加えて、かつての好色さを断ちきったかのような源典侍の贈歌は、「木草の色にも心を移<sup>24</sup>」し、朝顔姫君への懸想心を再燃させた光源氏を責めた。「うとまし」という感情はこうして芽生えるのである。

返歌に続いて、光源氏は「頼もしき契りぞや。いまのどかにぞ聞こえさすべき」と告げる。素直に読めば、「契り」を認める発言として受け取れるのだが、「聞こえさす」という表現に注目すると、「それだけ相手にへだたりを置く」<sup>24</sup>意識が見えてくる。また、和歌贈答後に続く形で光源氏の次のような感慨が語られる点にも注意したい。

月さし出でて、薄らかに積もれる雪の光りあひて、なかなかいとおもしろき夜のさまなり。ありつる老いらくの心げさうも、よからぬものの世のたとひとか聞きしと思し出でられて、をかしくなむ。 (朝顔・②・四八五頁)

右引用には、源典侍の存在を「老いらくの心げさう」と貶め、蔑みの気持ちを含めて、「をかしくなむ」とあざける光源氏の姿があり、まるで、源典侍から溢れ出る〈古い〉を排除するように、彼女を「よからぬもの」として見ている。

〈古い〉の自覚を深めた源典侍は、男の性的なつながりに限界を感じ、光源氏との間に新たな関係を築こうとしたのだが、彼女のそうした変貌は、逆に、時間の経過や逃れられぬ〈古い〉を印象づけることとなる。朝顔姫君への懸想心がある光源氏には、己の〈古い〉をどうしても認められない部分があり、〈古い〉を受け入れた源典侍など容認できないのであった。

では源典侍の役割・存在意義とは何であったのか。それは、贈答歌に続く光源氏の行動を辿ることで明らかとなる。次

に挙げるのは朝顔姫君との対話場面の一節である。

① 今宵はいとまめやかに聞こえたまひて、「一言、憎しなども、人づてならでのたはませんを、思ひ絶ゆるふしにもせん」と、下り立ちて責めきこえたまへど、……  
(朝顔・②・四八五頁)

物語展開上前後するが、光源氏の行動を比較するため、一度目の対話場面を掲出する。

② 宣旨、対面して、御消息は聞こゆ。「今さらに若々しき心地する御簾の前かな。神さびにける年月の労数へられはべるに、今は内外もゆるさせたまひてむとぞ頼みはべりける」とて、飽かず思したり。  
(朝顔・②・四七三頁)

引用①・②の違いを端的に述べると、会話における仲介者の存在である。引用②の場面では、光源氏が朝顔姫君の対応を恨んではいるが、「宣旨」という会話の取り次ぎ役が存在を認めている。「宣旨」の仲介により、対坐する二人の間には一定の距離が保たれていく。引用①では、二重傍線で示したように、光源氏が、「人づてなら」ぬ朝顔姫君の肉声を求めている。吉井美弥子によると、「女の『声』は、その『身体』があくまでも簾越し(5)にあるときに、つまりなんらかの『境界』によって隔てられているときにこそ、その外部にいる男に強く意識される」ようであり、しかも、「下り立ちて責めきこえ」る動作まで見せている。他者の介入を拒む強い口吻と、女の「身体」を強く求める姿がここに浮かぶ。読者は巻頭から続く自制心の縛りから解放された光源氏を認めることになる。

当事者同士の自制心により停滞の様相を見せていた〈恋物語〉は、源典侍との贈答以降、光源氏の急進的かつ積極的な行動によって、新たな局面へと進む可能性が開かれる。光源氏は〈古い〉た源典侍を「よからぬものの世のたとひ」とし

て排除したことで、己の心の中に横たわる葛藤にも決着をつけ、ようやく恋愛「癖」を存分に發揮していくのであった。

## 五、まとめにかえて―破局という結末

その〈恋物語〉は、読者の期待を裏切る形で終わりを告げる。次に引用する贈答歌は、二人の心理的な隔たり、あるいは恋愛観の差異を象徴する。

〈光源氏〉 つれなさを昔にこりぬ心こそ人のつらきに添へてつらけれ

(朝顔・四八六頁)

〈朝顔姫君〉 あらためて何かは見えむ人のうへにかかりと聞きし心がはりを

(同)

光源氏は、「昔にこりぬ心」の持ち主だと自虐的に詠いつつ、朝顔姫君の「つら」い態度の軟化をうながす。それに対しても、朝顔姫君の強固な姿勢は崩れず、あなたの求めるような「心がはり」はしないと宣言する。つかず離れずの均衡状態が保たれていた二人の関係は、光源氏が「人づてなら」ぬ〈声〉を求めたのが仇となり破たんする。ことの顛末はあまりにあっけなかつたわけだが、一方で、二人の関係は、光源氏と朝顔姫君の自制心のために、平行線のままこの巻の終盤まで食い込む可能性があった。停滞の様相を強めていたそうした物語に源典侍の「挿話的な再登場」がきわめて密接に関わっていたのである。

桃園邸に住む老女たちとの対話を通じて光源氏は、己の〈古い〉と向き合う。外山敦子は、光源氏が、「源典侍の『声』に行く手を阻まれる」とその構図を指摘するが、そうした外面的な障害を乗り越えたところで、まだ彼の中には、〈古い〉認識という容易に越えられぬ壁が生じていた。その内面的壁は、源典侍を「身をかへ」た存在、「古いの心げさう」として

切り捨てることで、初めて解消させることができた。すなわち、〈古い〉を体现する源典侍は、朝顔姫君との関係に踏み出す上で、是が非でも乗り越えなければならぬ存在であったことになる。

女五の宮は、光源氏と朝顔姫君の男女関係が結ばれる契機を作り、源典侍はその関係を進展させた。その意味において、彼女らの人物造型の類似は示唆的である。「朝顔」巻は、もはや自力で物語を展開させるだけの力を失った主役たちになり替わり、周辺的な存在が物語を展開させている。源典侍の登場・存在がそれを証しているのであった。

(注)

(1) 物語展開に関与しない〈端役〉は軽視される傾向にあった。近年では、久保朝孝ほか編『端役で光る源氏物語』、世界思想社、二〇〇九年のように積極的にその役割を考察するものも提出されている。

(2) 「朝顔」巻の特徴については、永井和子「朝顔―桐壺帝の世界への回帰」(『源氏物語と古い』、笠間書院、一九九五年)がまとめられ、吉岡曠「鴛鴦のうきね(上)―朝顔巻の光源氏夫婦」(『中古文学』、一三、一九七四年五月)、藤本勝義「回顧と喪失の構造―『朝顔』巻―」(『源氏物語の 人 ことば 文化』、新典社、一九九九年)などが過去との関わりを指摘する。

(3) 朝顔姫君との対照性を指摘した論考に、藤村潔「源典侍の場合」(『源氏物語の構造 第二』、赤尾照文堂、一九七一年)、小林正明「自閉庭園の美しき魂―朝顔姫君論―」(鈴木日出男編「人物造型からみた『源氏物語』(国文学解釈と鑑賞別冊)」、至文堂、一九九八年五月)などがあり、光源氏との関係を考察した論考に、渡瀬茂「『朝顔』の巻の源典侍」(『研究と資料』、二一、一九八九年七月)がある。

(4) 『源氏物語』の本文引用は、阿部秋生ほか校注・訳『新編日本古典文学全集』(小学館)により、本文引用の際には(巻名・分冊数・頁数)を記す。

(5) 秋山虔「好色人と生活者―光源氏の『癖』」(『王朝の文学空間』、東京大学出版会、一九八四年)

(6) 平林優子「神のゆるし」(鈴木一雄監修『源氏物語の鑑賞と基礎知識No.三三』、薄雲・朝顔(国文学「解釈と鑑賞」別冊)」、至文堂、二〇〇四年四月)

- (7) 小山利達「拒否の心情」(『源氏物語攷』、塙書房、一九九五年)
- (8) 永井和子「序論にかえて―非存在者としての老人」(『前掲著』)
- (9) 外山敦子「〈雑音〉としての『声』―老女の『声』を中心に―」(『源氏物語の老女房』、新典社、二〇〇五年)
- (10) 勝浦令子「妻の出家・老女の出家・寡婦の出家」(『女の信心―妻が出家した時代』、平凡社、一九九五年)に拠ると、出家の際、女性はその社会的身分などを放棄したという。
- (11) 『源氏積』(渋谷栄一編『源氏物語古注集成第一六卷』、おうふう、二〇〇〇年)
- (12) 『弄花抄』(伊井春樹編『源氏物語古注集成第八卷』、おうふう、一九八三年)
- (13) 『源氏物語 三』(石田穰二ほか校注『新潮日本古典集成一八』、新潮社、一九七八年)【頭注五・二〇二頁】
- (14) 『源氏物語 二』(柳井滋ほか校注『新日本古典文学大系二〇』、岩波書店、一九九四年)【脚注二一・二六三頁】
- (15) 鈴木裕子「源氏侍攷―物語世界の悪戯者―」(『駒沢短期大学研究紀要』、二三、一九九五年三月)
- (16) 注(3) 渡瀬論文。
- (17) ここでの対応を異例としたのは、光源氏が源氏侍に対して悪感情を抱いていたことは諸処の言動から推測される。「葵」巻では、「あさましう、古りがたくもいまめくかな、と憎さに、はしたなう」(②・二九頁) 源氏侍への返歌を詠出する。
- (18) 諸注釈書は、次の和歌を引歌として指摘されている。(『新編国歌大観』に拠る)
- 聖徳太子高岡山辺道人の家におはしけるに、餓ゑたる人みちのほとりにふせり、太子のりたまへる馬とどまりてゆかず、  
ぶちをあげてうちたまへどしりへしりぞきてとどまる、太子すなはち馬よりおりて、うゑたる人のもとにあゆみすすみたま  
ひて、むらさきのうへの御ぞをぬぎてうゑ人のうへにおほひたまふ、うたをよみてのたまはく
- しなてるやかたをか山にいひにうゑてふせるたび人あはれおやなし
- 『拾遺集』・哀傷・一三五〇
- (19) 鷺山茂雄「『朝顔』『少女』両巻の桐壺院姉妹―老女宮の役割をめぐって」(中野幸一編『平安文学の風貌』、武蔵野書院、二〇〇三年)
- (20) 今関敏子「子」(久保田淳ほか編『歌ことば歌枕大辞典』、角川書店、一九九九年)
- (21) 津島昭宏「『親』としての源氏侍―『朝顔』巻の登場をめぐって―」(『野州国文学』、七七、二〇〇六年三月)



(22) 『花鳥余情』(中野幸一編『源氏物語古註釈叢刊第二卷』、武蔵野書院、一九七八年)

(23) 家井美千子・古川江里「歌語『身をかふ』の表現―『源氏物語』朝顔巻の歌解釈のために―」(『アルテス リベラレス』(岩手大学人文社会科学部紀要)」、六八、二〇〇二年六月)

(24) 大野晋ほか編『岩波古語辞典 補訂版』、岩波書店、一九九〇年

(25) 吉井美弥子「『源氏物語』統編の『声』」(『読む源氏物語』読まれる源氏物語)、森話社、二〇〇八年)

(26) 注(9) 外山論文。

【付記】 本稿は、二〇〇九年古代文学研究会大会(於・かんぼの宿 彦根)における口頭発表をまとめたものである。記して発表に際してご教示を賜った方々に御礼申し上げたい。

(すぎうら・かずあき／博士後期課程三年)